

holding の観点からみた心理臨床面接における

枠の機能

坂井友美*・松下姫歌*

Consideration about the function of the frame in terms of holding.

Tomomi Sakai Himeka Matsushita

The purpose of counseling is for clients to understand themselves on their own. The settings needed for the interview is called a “frame” of an interview and includes deciding on a person, place, time, and fee. It has two functions: 1. It makes it easier for clients to mentally cut off any interference from daily life and express their inner side without fear. 2. By doing so, the expressed inner side will be paid attention to, thus making it easier for the clients to understand themselves. On the other hand, It may make for the clients to become aware of their unknown self and feel uneasy. This kind of “resistance” can occur as the counseling progresses as well as in the process of frame creation. Therefore, for the clients to see their inner side, even if they feel uneasy at the same time, a frame setting should be considered in the first stage. In this thesis, necessary facts during the frame creation stage are examined from the concept of holding propounded by Winnicott D.W.

Keyword: frame, holding, structure of psychotherapy

本論文では、心理療法の初期の段階において、クライエントが、面接に入っていく不安や内面と向き合う抵抗を抱えつつも、面接の中で自らの内面に向き合っていけるような、面接の「枠」の設定と枠づくりに必要な観点について、Winnicott, D.W. の holding の概念をもとに検討を試みることを目的とする。

1 心理臨床面接における枠

精神分析的な心理療法における枠とは、外面的には、「面接関係やセラピスト-クライエント間のコミュニケーションのあり方を規定する、心理面接の基本的で恒常的なルールや要因」(鏑, 1998)を指す。つまり、クライエントと心理療法をおこなっていく際の基本設定である。面接の基本設定

*広島大学教育学研究科 (Graduate school of Education, Hiroshima University)

は心理療法のオリエンテーションによって考え方が異なるが、主に、①人・②場所・③時間・④料金の4点についての取り決めが含まれ、現代の精神分析的な心理療法においてはこれら4点を次のように、基本的に一定に定めておこなう。①人:クライアントとその担当セラピストが面接に臨む。担当セラピストはクライアントと日常で接点をもたない。②場所:面接をおこなう場所をいつも同じ面接室に定める。③時間:一週間に一回、同じ曜日の同じ時間に会う、というように、面接の時間を、一定のインターバルで一定の時間に設定する。④料金:面接をおこなう料金を定める。このような枠をセラピスト側・相談機関側が定めるのは、そのような枠が、クライアントの心自身が抱えるテーマに取り組んでいく心的作業がなされるために必要であるからである。枠は、心理臨床面接とは何をすることなのかについてのセラピスト側の理解に裏打ちされねばならないし、その枠のあり方は、心理臨床面接に対するセラピスト側の理解のあり方を示すものと言える。

この点に関し、小此木(1990)は、精神分析的な心理療法における枠を「治療構造」と呼び、①面接の時間や場所などのように面接者が意図的に設定する要因に加えて、②各々の職場特有の物理的・制度的制約といった予め与えられている要因、③面接者の服装や調度品、④面接室外の諸条件などクライアントの心的リアリティの中で形成される要因も含めている。つまり、セラピスト側の枠の設定と提示は、セラピストがクライアントとの面接に必要な基本的な枠組をどう考えるかに加え、相談機関やセラピストが置かれている状況、問題を扱う準備態勢やキャパシティをも反映し、加えて、その枠の提示や願いを、クライアント側が心的リアリティとしてどのように受け取るかという面が重要となる。面接の枠に対するクライアントの受け取りや反応は、クライアントの自覚の有無にかかわらず、クライアントの心において扱われるべき心的課題にとって、適切で正当なアプローチがいかなるものかについての情報を含むものであると考えられる。

心理臨床面接においてなされることとセラピストの役割について、平木(2004)は「自分が問題解決に関わり続けたことによって、自分がどんなときに、どんなことを感じ、どんなことを考え、どんな反応をするかといった、いわば自分のありのままの姿がよく見えるようになる。そしてそれ以外の何ものでもない自分を理解し受け入れてくれるカウンセラー(注:セラピスト)がいることで、(中略)問題解決のエネルギーが自分の中から出てきたりして自分の変化が始まる」と述べている。鐘(1998)は、その際のセラピストの役割について、クライアントが自己理解を深めるためにクライアントの気づきをリードすると述べている。つまり、心理臨床面接では、クライアントが自分と向き合い、問題を含めて自己理解していくことが目的とされ、その際セラピストがクライアントを理解し受容することで、クライアントが自ら気づいていくためのサポートを行うのが、セラピストの役割であると考えられる。

先に述べたように、こうした心的作業を「専門的に」おこなうために、精神分析的な心理療法では、①クライアントと担当セラピストが、②同じ面接室で、③面接をおこなう時間を定めて、面接をおこない、その面接に対して④料金をクライアントが支払うという枠を設定する。これらはすべて、クライアントの生活の中に、日常性から切り離された人間関係の時空間を作り出す仕掛けである。しかも、その日常から切り離された、純粹に心に向き合うための人間関係の時空間を、日常的な時空間のどこか一定の時間と場所に確実に位置づけて、日常と心的作業とが併存しうる構造を産み出

す仕掛けである。その仕掛けの背後には、日常の中にあっては埋没して取り組みにくくなる心的作業が、クライアント自ら行いやすくなるような、専門的理解と関わりがある。釜・名島 (2000) は、「面接の枠組みを共有することで、面接関係が目的をもった専門的な援助関係であることが両者に自覚される」としている。つまり、面接の枠の設定をめぐる、クライアントとセラピストは、クライアントの心的課題へのアプローチに必要な枠組みや関わりのあり方を、あらためてその都度、自覚していくのだと考えられる。その中には、クライアントとセラピストの関係性が、クライアントにとって重要な友達関係や恋人関係などとは、性質の異なる重要性をもつものであることや、心のどのような点でのどのような関係をもつものであるのかや、それが損なわれないために何が大切になるのかといったことについての理解が含まれると考えられる。

2 心理臨床面接における枠の機能

こうした面接の枠を設定することに関連して、描画法における、中井 (1974) の枠づけ法についてとりあげたい。枠づけ法とは、描画法をおこなう際に、描画者の目の前で、用紙の四辺の縁に沿って、黒のサインペンでフリーハンドで線を引き、四辺をぐるりと枠付けしたものを手渡し、その枠の中に描画させる方法である。この方法は、中井が、河合隼雄が箱庭療法を日本に導入する際の講演で、統合失調症者が箱庭療法に用いる箱の木枠の内側に、枠に沿って柵をめぐるさせた事例を聞いたことをきっかけに発想されたものである。つまり、統合し難い内面を表出するためには、あるいは、統合し難い内面を抱えていくための自我の力を支えるためには、強力な枠が必要になるのであり、クライアントとセラピストとの間で、枠がしっかりと目に見える形で設定されることで、内面を抱える枠が、両者の心に、象徴的なイメージとして産み出されることが重要なのである。

この中井の枠付け法に関し、小山内・酒木・原岡・小野・塚本・村木 (1989) は、枠による内的世界と外的世界の分断は、「枠外の景色が視野の外に地として交代すると同時に、枠の視野内の風景が図となって突出し、そしてそのとき枠内が何もない空間の場合にはそこに表出という形の、自己存在の一樣態を喚起する」と述べている。このことは、心理臨床面接における枠の設定についてもあてはまると考えられ、面接枠によって日常 (枠外) と分断された面接室 (枠内) の時空間においては、自分の内面が強調されて意識されると考えられる。つまり、枠をつくるということが、内面を表し、内面を存在させ、内面を視野に入れ、向き合わせる機能をもつ。このような枠の機能によって、上に述べた心理臨床面接の目的である、クライアントが自ら気づき、自分自身をつかんでいくという作業が支えられるのだと考えられる。

加えて、中井 (1974) は、枠の機能の二側面として、「心的表出」を「保護し解放する側面」と「制限し拘束する側面」を指摘している。これに関し、小山内他 (1989) は、「枠が病者の世界と病者の世界ならざる世界とに分断」するとし、病者の世界ならざる世界が病者の世界にいわば国境線を越えて侵入しようとする場合には、これを阻止し、病者の世界を保護し、したがって病者が自分の固有の心的空間に安心して自己を解放できる機能を果たし、逆に病者の世界が病者の世界ならざる世界に進出しようとする際には、これを制限し拘束する役割を果たす」と述べている。この指摘は多くの重要な観点を含むものであるが、ここではまず、枠によって、クライアントの中で、日常 (枠

外)と面接の時空間にあるクライアントの内的世界(枠内)とを区切る力を支えるという点について言及しておきたい。そのような枠の機能によって、例えば、クライアントが日常的な価値観に埋没してしまわずに、自分の内面を見つめていけるようにするとともに、面接室内で表出した自分の内的世界が日常に影響しないようにする。そのことによって、安心して自由に内面を表出できる時空間が作られると考えられる。

しかし、田嶋(2003)は「枠は人のところやところの表出を保護するだけに、かえって深いものを露出させてしまう」と述べている。このことは、だからこそ、自分自身の根源的テーマに自らを関与させ、自分自身と深い関係をつくっていくことにつながるわけだが、そのようなとなみは、「自分の新しい側面に気づいて自分に対する認識が変わる」(神田橋, 1990)ことにつながる。神田橋(1990)は、「肯定的な面であるにしる見たくない面であるにしる自分の新しい側面に気づいて自分に対する認識が変わるということは侵襲的なことでありクライアントは揺らぐことになる」と述べている。クライアントが枠内に表出された自分の内面について目を向けていくと、自分でも気づいていなかった健康的な面や気づきたくない葛藤や問題に直面したり、自分への認識が変わり今までやってきた外界や自分への対応の仕方が使えなくなることへの不安や動揺を感じたりして、それ以上見ていくことに抵抗を生じる可能性があると考えられる。

このことから、面接枠は安心して内面を表出し、集中して自分の内面について考えることのできる場を保証する一方、面接の場で自分を表出し、自分に新たに向き合うことそのものが、不安を喚起するためにさまざまな形での抵抗が生じるというジレンマがあると考えられる。この点が、中井の指摘する「枠が表出を強いる面」と考えられる。したがって、面接の枠が、自分の内面を見ていく不安を抱えつつも、内面に向き合ってよりよく見ていく作業を支え、自分をつかみ直していく作業をしやすいものとして機能するような「枠づくり」が必要であると考えられる。そのためには、「セラピストが揺らぎを抱える態度を示し、また揺らぎを抱える治療枠を作り出す必要がある」(神田橋, 1990)と考えられる。

このことに関し、自分の内面に向き合い、未知の自分に新たに気づいていくことにまつわる不安と抵抗は、カウンセリングが進んでいく過程でも生じうるが、そもそも、カウンセリングの作業に入っていく「枠作り」の段階にも生じうる。したがって、クライアントが不安を抱えつつも自分の内面を見つめていくためには、最初の段階で、どのような枠の設定のあり方が必要なかを吟味すべきである。本論文では、特に、最初の枠づくりの段階に限定し、その段階に必要な点について、Winnicott, D.W.が提唱した holding の概念における、特に、母子関係の初期段階における母親の子に対する関わりに関する指摘をもとに考察してみたい。

3 holding の概念における母の子に対する関わりについての指摘

Winnicott, D.W.は、セラピストがクライアントを理解し共感すること、クライアントより先走らない解釈をすること、クライアントが安心して本当の自分を出していける面接の場を設定することを重要視している(北山, 1985)。Winnicott は、クライアントが安心して自分を出していけるように面接の場を抱えることを holding と呼び、セラピストを含めた holding を提供する面接枠のことを

holding environment (抱える環境) と呼んだ。

Winnicott (1958 北山 (監訳) 1990) は、心理療法においてセラピストに必要とされる態度を、子どもに対する母親の態度に見ており、それを holding と呼んでいる。holding は、生まれたばかりの子どもを身体的にも心理的にも受けとめ抱える母親のやり方と定義される。つまり、身体的には、子どもが安心していられるようなやり方で抱っこ holding することであり、心理的には、抱っこしたり、子どもの要求に適切に答えたり、子どものどんな要求や行動にも我慢しきれずに怒ったり報復したりするしことなく受けとめたりすることが (Chemama・Vandermersch 1998 小出訳者代表 2002) が含まれる。

Winnicott (1965 牛島 (監訳) 1984; 1958 北山 (監訳) 1990) は、holding において母親が行っているのは、子どもに共感することで、子どもが必要としているものを適切に読み取りそれを満たす対応をすることだとしている。Winnicott (1958 北山 (監訳) 1990) は、生まれたばかりの子どもは、例えば空腹や寒気などに対処する準備ができないが、そのような自分の存在に関わる問題に関する要求に、何の対応もされなかったり、適切でない対応をされ放っておかれると、子どもは不快で不安でとても安定してはおれなくなり、そのことに必死に対応しなければならなくなってしまう、と指摘している。このような侵襲的なできごとが頻繁にあると、それに対応するのに一生懸命になるため、外界ばかりに気が取られ、内面で連続した自己の感覚を成長させる機会が減ってしまう (1958 北山 (監訳) 1990)。したがって、できるだけこのようなことを防ぐこと、あるいは最小限にすることが、holding の機能に含まれる (北山, 1985)。

Winnicottはまた、このような、子ども自身の存在に関わる要求に、母親が身体的・心理的に適切に応じることによって、子どもは要求に応じてもらう自分を意識し始めること、同時に自分が感じていることが正しいという感覚が支持されること、子どもに自分という存在が安定して存在し続けているという感覚が生まれてくること (Winnicott 1965 牛島 (訳) 1977) について指摘している。つまり「応じられる」自分の存在を意識することや、ある心的内容が「応じられる」ことによってその存在を感じることは、自分の存在や内面的存在を「対象」として見いだすことにつながるのだと考えられる。加えて、母親が子どもが必要としているものを感じ取って対応することは、子どもにとって自分の存在が認められる経験である一方で、子ども自身が自分の存在を認める経験であるためと考えられる。

さらに、Winnicott (1971 橋本 (訳) 1979) は、こうした母子間の交流を通じて、子どもの中に「母親に見つめられ母親を見つめる母親とは違う自分の感覚が意識されるようになる」とも述べている。このことは、母親に受けとめられ、読み取られ、満たされた面だけが、「自分」になるのではない、ということを指摘していると考えられる。生まれたばかりの子どもは、自分というものに対して無自覚であるばかりか、自分を生き延びさせていくために必要な対処についても無自覚な状態にある。しかし、子ども自身が生き延びるために必要なものを感じ取る感覚の萌芽が、例えば、ある種のむずがりなどによって表される。そのような、子どもの要求を母親が感じ取って対応することは、子ども自身の、自分自身を感じ、自分自身を生かす力を支えることにつながる。加えて、母親が自分を見ているという感覚とイメージは、自分自身を見つめる大きな存在のイメージにつながり、自分

を見つめる母親の機能が、自らを見つめる大きな次元での自分として内在化していくことにつながると考えられる。これらの点から、母親が子どもを見つめ、感じ取り、受けとめることは、子どもが自分自身を感覚しつかんでいく力を促進すると考えられる。さらには、そのようにして、子どもが“自分で感じ、自分の目で物事をとらえる”ようになるために、子どもが必要とし求めていることと母親の受け取りや対応がズレることが生じ、そのズレの感覚が、さらに母親とは異なる自分の意識を促進するものと考えられる。

Winnicott (1958 北山 (監訳) 1990) は、子どもの要求と母親の対応にズレが生じ、母親が適切に反応することに失敗しても、それに気づいて、すぐに対応し直すことで、子どもは常に母親が傍にいて対応してくれると感じることができ、自分はこの自分で連続して存在できると感じ、世界と関わっていくことに対する安心感を得ることができるとしている。加えて、母親とは異なる自分が意識されることに関しても、そのような母親と異なる自分が生じてもお、自分の欲求に対して、母親が向き合い続けるということを通じて、「自分という存在が安定して存在し続けているという感覚が生まれてくる」(Winnicott 1965 牛島 (訳) 1977) と述べている。この、存在し続ける感覚とは、「今までの経験を統合する時間的な連続性」(北山, 1989) と、「機嫌が良かったり泣いたりする様々な自分は全て1つの自分であるという空間的な連続性」(1958 北山 (監訳) 1990) のことである。こうして、子どもは自分自身が意識されるようになり、その上で自分が今までどんな時でも安定して存在してきた一人の自分であると感じることができるようになり、自分というひとつのパーソナリティを築いていくのである (Winnicott 1965 牛島 (訳) 1977)。

このように、holding の概念における、生まれたばかりの子どもに対する母親の関わりについての指摘は、Winnicott の言説をさらに敷衍して検討したところ、次の観点が含まれると考えられる。

- 1) まず重要なのが、子ども自身ではまだ対応できない、生存にかかわる問題にまつわる子どもの要求を感じ取り、身体的・心理的な面で、子どもが生存できるよう対応する関わりであること。
- 2) 子どもの生存に関わる問題が母親の関わりによって保障されることで、子どもは、自分の生存を脅かす障害への対応にエネルギーを費やすのではなく、内面の連続性を育てることができると。
 - ・子ども自身の生存に関わる要求を、母親が読み取り対応することは、
- 3) 「対応される」自分の存在に気づき、自分を対象として見いだす素地を産み出しうること。
- 4) 子ども自身が感じていることが正しいと感じることにつながること。
 - ・母親に見つめられる自分を感じることは、
- 5) 自分を見つめる自分の内在化につながること。
- 6) 母親とは異なる自分を見いだすことにつながること。
 - ・母子のズレが生じて、母親がズレに対応していくことは、
- 7) 子どもが自分の連続性を感じ、安心して環境に関わっていける力につながること。
- 8) 母親と異なる自分があっても、自分の連続性を抱えていける力につながること。
- 9) どんなことがあっても、どんな自分があっても、自分というひとつのパーソナリティとして東ねていける力につながること。

このように、holding の観点に含まれる、生まれたばかりの子どもに対する母親の関わりまつわる指摘は、生存にまつわる問題に対する子どもの要求を母親が適切に読み取り対応することが、子どもが自らの存在や感じていることを重要なものとして見だし、自分の目で、母親とは異なる自分をつかんでいく力を育てることにつながる、というものであると考えられる。

4 holding の機能を持つ面接の枠づくり

以上に見てきたような、holding の概念に含まれる、生まれたばかりの子どもにおける、生存にまつわる問題に関わる欲求に対する、母親の関わりについての指摘は、心理療法において、これから初めて面接を開始しようとする段階を考える上で大きなヒントになると考えられる。なぜなら、これから初めて面接に臨もうとするクライアントは、自らの中に、何か大切に扱われなければならないもの、自分が自分である根底にかかわるような、心的次元での生死にかかわるようなものが存在していることを、無意識のうちに感じながらも、まだそれがどういうもので、どう扱うべきかについてはわからない状態にある。そういう意味で、クライアントは、心的な自分として新たに生まれつつある段階であるとも言えるからである。

したがって、上記のような、母子における holding の観点は、以下のように、クライアントに対するセラピストの holding として読み替えることが可能であると考えられる。つまり、クライアントが自分で自分を見つめ、つかんでいくための、最初の枠作りに必要な holding には、以下の観点が含まれると考えられる。

- 1) クライアントの、心的次元での生存にかかわる問題にまつわるクライアントの要求を感じ取ること。
- 2) クライアントの心的次元での生存に関わる問題が、セラピストの関わりによって保障されることで、クライアントは、内面の連続性を育てることができること。
- 3) そのことは、「対応される」クライアント自身の存在に気づき、自分を対象として見いだす素地を産み出しうること。
- 4) さらに、クライアント自身が感じていることが正しいと感じることにつながる。
- 5) セラピストに見つめられる自分を感じることは、クライアントにおける、自分を見つめる自分の内在化につながる。
- 6) それは、セラピストとは異なる自分を見いだすことにもつながること。
- 7) クライアントとセラピストの間でズレが生じて、セラピストがズレに対応していくことは、クライアントが自分の連続性を感じ、安心して環境に関わっていける力につながる。
- 8) セラピストと異なる自分があっても、自分の連続性を抱えていける力につながる。
- 9) どんなことがあっても、どんな自分があらわれても、自分というひとつのパーソナリティとして東ねていける力につながる。

このように、最初の枠づくりの段階で、1) に述べた、セラピストがクライアントの心の次元での

生存感覚にもとづく要求をいかに読み取り対応するかが肝心であると考えられる。クライアントが内面に向き合う、そもそもの入り口のところで、面接に入っていくことにまつわる不安や抵抗を感じた時に、その不安や抵抗に含まれているものを、セラピストがどのように理解し対応しているかが問題となると考えられる。

鐘・名島 (2000) は、面接の枠を設定するときには「セラピストとクライアントがよく話し合うことが重要である」としている。面接で自分の内面に向き合うことにまつわる不安や抵抗は、一つには枠づけられることによって強調されるため、例えば、キャンセルや遅刻、財布を忘れる、といった行動や、担当を替えてほしいといった要求など、枠に対する不安や抵抗として表されうる。それが、どのような形をもち、どのような性質のものであるかは、クライアントの心的課題を抱える上で重要となるものをキャッチしていることの反映と考えられる。しかし、枠にまつわる不安や抵抗の表出を、セラピストがクライアントの心の訴えの可能性として考えてみようと思わず受け流してしまったり、表面的に受け取ってしまったりすると、クライアントは、自分の内面の存在の重みを感じられず、内面に向き合う不安を外在化して、それへの対処ばかりに終始し、不安なままになってしまうと考えられる。

セラピストがクライアントの表出する不安を「共感的に理解し適切に扱う」ことは、クライアントの心的存在としての生死にとって、何を最も重要なことと読み取り、それをどのような訴えとして受けとめ、取り扱うことができるかの「適切性」にかかっていると考えられる。それが、クライアントの心にとってフィットすれば、クライアントはセラピストを信頼できると感じ、またセラピストとともにその不安を面接室内で取り扱うことで、不安を取り扱い抱えながら、自分の内面を表出し、上記の 2) 以降のように、自らの心的存在を見だし、内面を対象化して見ていく作業に歩みだせるようになると考えられる。このように、セラピストとクライアントが枠について話し合う際、クライアントが要求したり主張したりすることの中に、「正当性」が見いだされることが重要であると考えられる。クライアントの枠に対する抵抗や不安を、単なる枠破りとして、例えば「クライアントが面接の枠の意味を理解していないから」「クライアントにセラピストの意図が伝わっていなかったから」というような観点で見てしまうのではなく、今の面接の枠にはまることのできない理由があるという点にしっかりと目を向けることが重要なのだと考えられる。

その際、セラピストは、クライアントの感じていることをできるだけ理解しフィットしうようにとアプローチする一方で、セラピストの理解との間のズレが生じうることをも、中立に認めることもまた重要であると考えられる。そのような態度が、上記の 6) 以降に述べたような、クライアントが自分の目で自分をつかみ、どんなことがあっても自分であるという感覚を支える関わりとなりうるのだと考えられる。

このような holding をおこなうことが、クライアントにとって、自分のペースに合った枠づくりとなり、そのような枠づくりを通して、自分のペースをつかんでいくことにつながるのではないかと考えられる。特に、今回検討したような、面接初期の枠作りを以上のような holding の観点を大切にしておこなうことによって、クライアントが自由に、内面に向き合い、自分をつかむ作業が進んでいく土壌ができると考えられる。

今回は、holding の概念のうち、初期の母子関係における、母親の子どもに対する関わりについての観点をとりあげて、面接初期のクライアントの不安に対するセラピストの関わりについて考察した。今後は、holding の概念におけるその他の諸側面についても詳細に検討し、その一つ一つの側面から、心理臨床面接のプロセスと面接の枠との関係について捉え直すこと、加えて、今回取り上げなかった箱庭療法と描画の枠のもつ holding 機能に関しても、面接の枠との二重枠 (田寫, 2003) になっている面や、枠が象徴的な可視性を帯びている面での特異性との関係について考察していく必要があると思われる。

引用文献

- Chemama,R.&Vandermersch.B. (Eds). (1998). *Dictionnaire de la psychanalyse*. 3 LAROUSSE BORDAS. (シエママ. R・ヴァンデルメルシュ. B (編) 小出浩之他 (訳者代表) (2002). 精神分析事典 新版 第3版 弘文堂 61-62.)
- 平木典子 (2004). カウンセリングの話新版 朝日新聞社 3-5.
- Jan Abram (1996). *The language of Winnicott, a dictionary of Winnicott, s use of words*. London:H.Karnac Books. (ジャン, A. 館直彦監 (訳) (2006). ウィニコット用語辞典 誠信書房 71-77, 99-103, 133-155,158-165, 166-181, 202-207.)
- 神田橋修治 (1990). 精神療法面接のコツ 誠信書房 83-103,122-124.
- 北山修 (1985). 錯覚と脱錯覚 岩崎学術出版社 61-68,174-197
- 北山修 (1989). ウィニコットの"holding"についての覚え書き 北山修 (監訳) (1989). 抱えることと解釈 岩崎学術出版社 359-363.
- 中井久夫 (1974). 枠づけ法覚え書 芸術療法 5 15-19. 中井久夫 (1985). 中井久夫著作集 治療 岩崎学術出版社 192-203.
- 小此木啓吾 (1991). 治療構造論序説 岩崎徹也他 (編) (1991). 治療構造論 岩崎学術出版社 1-44.
- 小山内実・酒木保・原岡陽一・小野正宏・塚本隆三・村木彰 (1989). 枠づけ法における「枠」の意味—枠の原義とその治療的転動— 芸術療法 20 7-13.
- 田寫誠一 (編) (2003). 臨床心理面接技法 2 誠信書房 300-307.
- 鐘幹八郎 (監修) (1998). 精神分析的な心理療法の手引き 誠信書房 16-19.
- 鐘幹八郎・名島潤慈 (編) (2000). 新版心理臨床家の手引き 誠信書房 84-94.
- Winnicott,,D.W. (1958). *Collect Papers:Through Paediatrics to Psycho-Analysis*. London:Tavistock. New York:Basic Books. (ウィニコット.D.W. 北山修 (監訳) (1990). ウィニコット著作論文集 2 児童分析から精神分析へ 岩崎学術出版社 61,173-196,245.)
- Winnicott,,D.W. (1965). *The maturational processes and the facilitating envinment*. London: Hogarth Press. (ウィニコット.D.W. 牛島定信 (訳) (1977). 現代精神分析双書第Ⅱ期・2 情緒発達の精神分析理論-自我の芽生えと母なるもの 岩崎学術出版社 33-56.)
- Winnicott,,D.W. (1971). *Playing and reality*. London:Tavistock. (ウィニコット.D.W. 橋本雅雄 (訳) (1979). 現代精神分析双書第Ⅱ期・4 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社 166-176.)